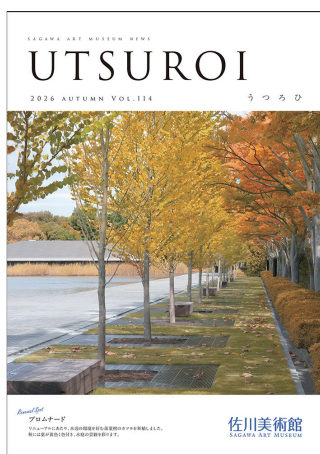
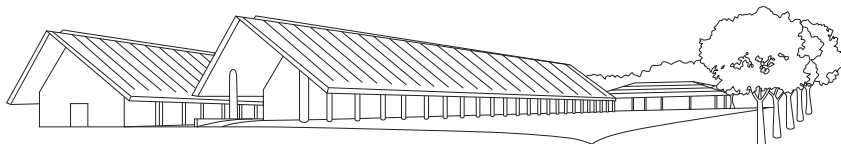


うつろひ VOL.114

リリースのお知らせ



佐川美術館友の会会員の方を対象に
年4回季刊誌を発行しており、
展覧会のみどころや耳より情報をお知らせしています。
10/1 発行の114号では、
『藤田嗣治 7つの情熱』展 を特集します。
耳寄り情報満載のその他コーナーもお見逃しなく！

目次

企画展 藤田嗣治 7つの情熱	1-3
ART up	4
コレクション展 佐藤忠良	PICK UP 5
コレクション展 平山郁夫	6
利休と樂茶碗	PICK UP 7
スタッフのとおき	8
フジさんが行く！ SHIGART	9
【告知】次回展	10
美術館を支えるヒト	裏表紙

次のページで
ちょっとだけ紹介！

年会費 3,000 円
でオトク！

友の会会員
募集中



詳しくは
コチラ

友の会会員の方には、季刊誌を
ご自宅までお届けします。
その他にも特典がいろいろ！
詳しくは美術館公式 HP 内、
友の会ページをご覧ください。

Join the Friends
of the Museum

かざらない一瞬が魅せる美しさ

本展では同時開催の藤田嗣治展にちなみ、佐藤忠良が藤田と同じく情熱を注いだ「子ども」と「女性」のモチーフに焦点を当てます。1960年代、佐藤はアトリエで預かっていた友人の画家朝倉摂の娘・亜古をモデルに、「小児科の忠さん」と仲間内で呼ばれるほど多くの子ども像を手掛けました。1970～80年代には、弟子の彫刻家・笹戸千津子（ささと ちづこ）をモデルにした自然体のポーズをとる女性像が高く評価され、新たなスタイルを確立します。今回は、身近な人物を題材にすることが多かった作者とモデルたちの関係性を紐解き、佐藤の子ども像・女性像の本質に迫ります。



《ふざけっこ》
1964年

子ども像

お風呂上がりにはバスタオルを巻いて無邪気に逃げ回る亜古の様子を捉えた《ふざけっこ》に対し、その2年後に制作された《バスタオル》は、同じようにタオルを身にまといながらも落ち着いた佇まいを見せ、モデルの成長がうかがえます。子どもと共に過ごす時間を愛おしむ、作者の温かい眼差しが感じられる作品です。



《バスタオル》
1966年

女性像

「あぐら」は当時の女性にとってあまり行儀の良い姿勢ではなかったはずですが、あえて挑んだのは、抑揚をきかせながらの開かれる思いを構成の中に試みようとしたためと語っています。本作のモデルは1970年より助手としてアトリエに通っていた笹戸で、ゆったりと安らいだ雰囲気からは、作者とモデルの信頼関係が伝わってくるようです。



《あぐら》
1978年

Information

佐藤忠良
子どもと女性像

会期：開催中～
11月23日(月・祝)

Topic

佐藤忠良とフランス

アーティストたちが憧れる芸術の都・パリ。ロダンらのフランス近代彫刻に感銘を受けて彫刻家を志した佐藤も、パリに憧れた一人でした。戦時中に満州へ召集され、日本へ戻れないかもしれないと覚悟した時、中国から陸続きのパリへ行くしかないと考えたこともあったといいます。その後、念願叶ってパリの地を踏んだのは1971年(当時59歳)のことです。佐藤はこの1か月に及ぶヨーロッパ旅行に20冊ほどのスケッチブックを携えて写生に励みました。また1981年には、フランスの国立ロダン美術館から招待を受けて日本人初となる個展を開催。パリを夢見続けた佐藤にとって、この個展は記念碑的な出来事でした。本展ではその際に制作された《鳥の皿》を初公開します。



皿の下部には「1981 PARIS CHURYO」の文字が刻まれています。



《鳥の皿》1981年

利休と樂茶碗

侘茶の大成者である千利休(1522-1591)。

彼の理想とこだわりを詰め込み、陶工・長次郎の手によって生み出されたのが「樂茶碗」です。

今もなお、茶の湯の最高峰とされる茶碗がどのようにして誕生したのか。

本コーナーでは、そのストーリーをご紹介します。

1 侘茶を追求する利休

時は戦国時代。堺の商家に生まれた千宗易*は、若い頃から侘茶を学び、その心を広めるべく茶人として邁進していました。

*広く知られている「利休」の名は晩年に称していたもの。

そもそも…侘びって何？

質素で慎ましく簡素なものや不完全さの中に、美しさや精神的な豊かさを見出す日本独自の美意識のこと。利休はこの考え方を茶の湯に昇華させ、「侘茶」を大成しました。

2 理想の茶碗を求めて

利休は、侘茶を極めるために今までにない全く新しい茶碗が必要だと考えます。当時の茶碗の最高峰は唐物(中国産)や高麗物(朝鮮半島産)などの外国産。利休はそれらの概念を覆す、「侘び」の精神を体現した日本独自の茶碗を生み出そうと模索し始めます。

3 陶工・長次郎との出会い

理想の茶碗を形にできる職人を探していた利休の目に留まったのが長次郎でした。共通の知人である茶人を介してその腕前を知った利休は、茶碗の制作を依頼します。

4 究極の茶碗が完成！

長次郎が完成させた茶碗は、手捏ねならではの温かみと装飾を削ぎ落した深い黒色の、これまで誰も見たことがない革新的な茶碗でした。利休は一目でこれを気に入り大絶賛！ここに侘茶の精神性そのものを写した茶碗が誕生したのです。

樂の名前の由来

長次郎の作った茶碗は当初「今焼」(今風の最新作という意味)と呼ばれていましたが、聚樂第の土を使用していること、豊臣秀吉より「樂」の印字を賜ったことから、「樂焼」と呼ばれるようになりました。

長次郎って誰？

中国系渡来人の父を持つとされる京都の陶工。父より受け継いだ中国・明時代の高度な焼物の技術や技法に精通していた。

次回展では、長次郎から450年受け継がれた、樂直入が作陶する黒樂茶碗を紹介します！



黒樂茶碗《我行窮水處》2007年

長次郎から継承されてきた伝統的な黒樂茶碗と、焼貫技法を駆使した直入作品の特徴である革新的な焼貫黒樂茶碗。これらの茶碗合わせて約30点を展示します。樂直入の生み出す幅広い「黒」の世界をお楽しみください。

「黒の世界」

12月8日(火)
〜2027年3月28日(日)

次回の展覧会

開催中の展覧会

「創造の軌跡」

開催中〜11月23日(月・祝)

これまで14回にわたって開催された吉左衛門X展のうち、第11〜13回展で作陶された茶碗を展示しています。